Bulletin of Kansai University of Nursing and Health Sciences. Vol. 6, No. 1, pp.30-38, 2014

研究報告

看護技術「陰部洗浄」に関する臨床での実践方法および看護系大学の教授内容

Clinical Nursing Practice of Perineal Care and the Teaching Contents at Nursing Universities

服部直子[1)]，犀川由紀子[1)]，山本洋子[1)]，小平京子[1)]
1）関西看護医療大学　看護学部　基礎・成人看護学

Naoko Hattori, Yukiko Saikawa, Yoko Yamamoto, Kyoko Kodaira
1）Kansai University of Nursing and Health Sciences, Faculty of Nursing, Fundamental and Adult Nursing

要旨：【目的】臥床患者に対する看護技術「陰部洗浄」に関して，臨床で実践している内容と看護基礎教育で教授している内容を明らかにし，陰部洗浄の方法とその教育方法を検討する。【方法】質問紙調査【対象】近畿圏200床以上の病院で陰部洗浄を実施している看護職，および西日本の私立看護系大学において陰部洗浄を教授している教員【結果】有効回答数は看護師222名，看護教員38名であった。臨床では99％が陰部洗浄で紙オムツを使用していた。実施上の困難として「股関節の可動域制限があり開脚できない患者への対処」，「自分で臀部を挙上できない患者への対処」等，患者の身体的状況に関連する内容と，使用物品に関する内容があげられた。看護系大学では，3分の2が紙オムツ，約半数が便器を使用する方法で陰部洗浄を教授し，教授上の困難として，「モデル教材を使用する限界」，「学生の性差を踏まえた教育方法」，「教育内容の迷い」等があげられた。【考察】陰部洗浄の方法については，安全で安楽な用具開発の必要性が示唆された。看護基礎教育においては，臨床の現状を踏まえた上で複数の方法で教授すること，方法のエビデンスの確立やモデル教材の改善が必要である。

キーワード：陰部洗浄，臨床，実践方法，看護系大学，教授内容
Keywords：perineal care, clinical practice, nursing skill, nursing university, teaching contents

Ⅰ．はじめに

近年，看護師に質の高い看護を提供する能力が求められる中，看護基礎教育で培われた学生の看護実践能力と，就職後に臨床で求められる看護実践能力との間の乖離が問題となってきた。このような乖離が生じる要因として，看護業務の複雑化，患者の重症化，患者の安全擁護に対する意識の高まりといった医療と看護をとりまく状況の変化によって，より高い看護実践能力が求められていることが指摘されてきた（穴沢・松山，2004；田代ら，2005）。しかしその他にも，看護基礎教育で学生が学習する内容が臨床で実践されている内容とは異なっており，現実に即したものではないことも一つの要因ではないかと推察された。

例えば，床上臥床患者に対する看護技術「陰部洗浄」に関して，学生が学習するツールとして必要なテキストや参考書，視聴覚映像などの教材を調査した山本ら（2013）によると，それらの殆ど

において取り上げられていた方法は，便器を用いた陰部洗浄であった。しかし，臨床において床上臥床している患者の陰部洗浄を行う場合，実際には紙オムツを使用して行う傾向があると我々は認識している。このように，床上臥床患者への陰部洗浄について，看護基礎教育において学習する内容が臨床で必要とされる内容とは異なっているのではないかと思われた。

一方，看護基礎教育を巡る動きとして，2003年3月に厚生労働省から「看護基礎教育における技術教育の在り方に関する検討会報告書」が出され，以降，看護基礎教育における実践能力の充実について様々な議論が進められてきた。そして2007年，学生が臨床実践能力を習得できるよう，より臨床実践に近い状況を想定した学習ができるように演習を強化することが明文化され（厚生労働省），2009年の看護基礎教育のカリキュラム改正の焦点のひとつとなった。このように看護基礎教育における学生の実践能力の向上に向けた教育体制の整備が方向づけられてきた。

しかしながら，臨床で実践されている陰部洗浄の方法について明らかにする報告はこれまでになく，また実践されている方法が適切かどうかについて検証したものも見当たらなかった。さらに，看護基礎教育において使用可能な教材の内容は明らかになったものの，実際に教授されている内容について調査しているものはなく，その実態は把握できていなかった。そこで今回我々は，陰部洗浄について，臨床で実践されている方法と，看護基礎教育において教授されている内容を明らかにするとともに，よりよい陰部洗浄の援助方法とその教育方法について検討するために本研究を実施した。

Ⅱ．研究目的

臥床患者に対する看護技術「陰部洗浄」に関して，臨床で実践されている内容と看護基礎教育で教授されている内容を明らかにし，「陰部洗浄」の方法とその教育方法について検討する。

Ⅲ．研究の方法

1．研究デザイン

質問紙郵送法による調査研究

2．調査の方法

臨床で実践されている内容に関する調査をＡ，看護基礎教育で教授されている内容に関する調査をＢとし，以下に各々の方法を述べる。

【調査Ａ】

臨床において実践されている臥床患者の「陰部洗浄」の内容とその問題点に関する実態調査

1）対象

近畿6府県の200床以上の病院から無作為に抽出した100病院のうち，研究に同意を得られた病院で臥床患者に対する陰部洗浄を行っている看護職

2）方法

病院看護部に協力依頼の文書を送付し，協力の得られた病院にアンケート，説明文書および同意書を送付，協力可能な看護職者に回答してもらった後，個々に返信用の封筒を用いて返信してもらった。

3）調査の内容

⑴実施している陰部洗浄の方法
⑵陰部洗浄を実施する上で困難に感じていること
⑶陰部洗浄を実施する上で工夫していること
⑷陰部洗浄を実施する上であったらよいと思う物品

【調査Ｂ】

看護系大学で教授されている臥床患者の「陰部洗浄」の内容とその問題点に関する実態調査

1）対象

西日本の私立看護系大学106校のうち，研究に同意を得られた大学の教員で，臥床での陰部洗浄について教授している者

2）方法

看護系大学に協力依頼の文書を送付し，協力の得られた大学にアンケート，説明文書および同意書を送付し，協力可能な教員に回答してもらった後，個々に返信用の封筒を用いて返信してもらった。

3）調査の内容

⑴教授している陰部洗浄の方法
⑵陰部洗浄を教授するうえで困難に感じていること

⑶陰部洗浄の実施および教授する上であったらよいと思う物品

3．分析の方法

調査A，Bで得られたアンケート内容について，数値で示されるものは単純統計処理をし，困難に感じている点等の自由記述については，類似した記述内容ごとに整理・分類した。記述内容の分類は，共同研究者間で一致するまで繰り返し討議を行った。

4．調査期間

平成23年11月～平成24年1月

5．倫理的配慮

研究協力者およびその所属先に，研究目的，研究の方法，研究参加者の個人情報の保護，自由意思による参加と同意撤回の任意性，研究結果の開示，研究参加者にもたらされる利益および不利益等について紙面（説明文書）をもって説明した。説明文書による説明に対して理解し，了承を得た場合，書面にて同意を得た。また，調査で得られたデータから個人が特定されないように無記名でのアンケート調査とした。なお，本研究は研究者の所属機関の倫理審査委員会において承認を得て実施した。

Ⅳ．結果

1．調査Aについて

研究の参加に同意を得られたのは29病院であり，送付した質問紙の数は304，回収した数は226（回収率74.3%），このうち有効回答数は222であった。回答者の職種は，看護師215名，准看護師6名，助産師1名であった。

1）臨床で実践している陰部洗浄の方法（表1）

陰部洗浄を実施する際に使用する物品について，「便器を使用」，「紙オムツを使用」，「その他」の3つの選択肢により回答を求めたところ，回答者222名中，220名（99%）が「紙オムツを使用」と回答していた。「便器を使用」と回答したのは36名（16%）であったが，36名のうち，この回答のみにマークしていたのは1名であり，便器を使用している看護師の殆どが状況によって紙オムツを使用していた。

表1　実践している陰部洗浄の方法（複数回答）

n=222

方法	回答数
紙オムツを使用	220
便器を使用	36
その他（ポータブルトイレ・洋式トイレ）	24

また，紙オムツを使用する理由として「病棟のマニュアルでは便器使用となっているが，陰部洗浄が必要な患者はオムツを使用していることが多い」，「失禁患者や下痢の患者には便器での陰部洗浄はできない」，「臀部を持ち上げられなかったり，腰痛があったりする」，「便器は安定感がなく湯がこぼれやすい」，「紙オムツの場合，側臥位で臀部まで洗浄できる」等を挙げていた。

2）陰部洗浄を実施する上で困難に感じていること（表2）

現在実施している方法で困難に感じていることを，選択および自由記述で回答を求めた結果，選択肢への回答は表2のとおりである。

また「その他」の欄への自由記述として，「シーツや衣服まで濡らしてしまう」(6)，「全身状態が悪い，あるいは四肢の拘縮が強い患者への対応」(5)，「体位変換により苦痛を訴える患者への対応」(3)，「便器挿入時の痛みや違和感を嫌がられる」(3)，「感染対策」(2)，「高齢者や骨突出のある患者に便器が使いにくい」(1)が挙げられた。（　）の数字はデータ数を示す。

表2　陰部洗浄を実施する上で困難に感じていること（複数回答）

n=222

困難に感じていること（選択肢）	回答数
股関節の可動域制限があり開脚できない患者への対処	103
紙オムツのコスト	93
褥瘡等皮膚などに異常のある場合の対処	67
自分で臀部を挙上できない患者への対処	47
洗い流す湯量が制限される	34

表3　陰部洗浄を実施する上で工夫していること　　n＝93　（　）内は記述数

カテゴリー	サブカテゴリー	主な内容
皮膚保護の工夫（61）	泡で洗う（30）	・しっかり泡立てて洗い，こすらない。 ・ビニール袋に液体石けんと少量の湯を入れてよく振り，その泡で洗う。 ・泡タイプのボディソープを使用している。
	十分に洗う（12）	・石けん分を残さないように十分な量の湯を使用する。 ・臀部までしっかり洗う。
	薬剤の使用（12）	・便・尿失禁がある場合，撥水剤を使用している。 ・必要に応じて，洗浄・撥水・保湿剤を使用している。
	回数の制限（6）	・皮膚への負担を減らすため，陰部洗浄は１日１回と院内で決めている。 ・石けんを使用した洗浄は1日1回としている。 ・少量の便であれば洗浄せず，拭き取る。
	水分を残さない（1）	・水の吸収が良いキッチンペーパーを使用している。
費用負担の軽減のための工夫（25）	費用負担の軽減のための工夫（25）	・排便後のオムツの汚れていない部分を使用している。 ・オムツではなく尿とりパッドを使用する。 ・洗い流す前に泡を拭き取り，少ない湯で洗浄できるようにする。 ・便を拭き取るためにぼろ布を活用している。
寝衣・シーツを濡らさない洗い方の工夫（19）	寝衣・シーツを濡らさない洗い方の工夫（19）	・オムツやタオルの配置を工夫している。 ・オムツの下に新聞紙を敷いている。 ・衣類が濡れないようにガーゼ/古タオルをカットしたものを腹部に置いている。 ・洗い流さなくてもよい陰部洗浄剤を湯に加えて使用している。
使いやすい陰部洗浄用ボトルの工夫（8）	使いやすい陰部洗浄用ボトルの工夫（8）	・使用済みのペットボトルを使用している。 ・100円ショップのソースボトルを使っている。

表4　陰部洗浄を実施する上であったらよいと思うもの　　n＝57　（　）内は記述数

カテゴリー	具体的な記述（抜粋）
陰部洗浄用シートもしくは便器（21）	・吸収のよいオムツもしくはシート ・やわらかい便器（臀部に痛みがないように） ・臀部を持ち上げられない患者に使用できる洗浄水を受けられるようなもの ・便器より挿入しやすい容器 ・コストが低いシート
陰部洗浄用ボトル（17）	・片手で水圧・湯量を操作・調整できるようなボトル ・保温できる陰洗用ボトル ・倒れてもこぼれない陰洗ボトル
石けんを泡立てるもの（14）	・泡で出てくる石けん ・泡立てやすい容器
洗浄後に拭き取るもの・乾燥させるもの（8）	・吸収性・柔軟性があり破れにくいディスポタオル ・陰部・臀部が安全かつ迅速に乾燥できるようなもの
洗浄液（5）	・洗浄剤と皮膚保護剤が入った陰部洗浄液 ・洗い流しが不要な洗浄液
ガーゼ（5）	・便器やポータブルトイレで洗浄した後そのまま流せるガーゼ ・石けんつきガーゼ
その他（6）	・臀部の下まで拭くための長いディスポーザブル手袋 ・恥骨部に湯が流れないようにする道具

3）陰部洗浄を実施する上で工夫していること（表3）

陰部洗浄を実施する上で工夫していることについて自由記述で回答を求めたところ，93名から回答を得た。この内容を分析した結果，113のデータが抽出され，表3に示す4つのカテゴリーに分類された。

4）陰部洗浄を実施する上であったらよいと思う物品（表4）

あったらよいと思う物品について自由記述で回答を求めたところ，57名から76の記述が得られ，表4に示す7つのカテゴリーに分類された。

2．調査Bについて

研究に同意を得られた看護系大学は30校であり，送付した質問紙の数は98，回収した数は38（回収率は38.8%），すべてが有効回答であった。

1）教授している陰部洗浄の方法（表5）

教授している陰部洗浄の方法について，「便器を使用する方法」，「紙オムツを使用する方法」，「その他の物品を使用する方法」の3つの選択肢により回答を求めたところ，回答者38名中，「便器を使用する方法」と回答したのは20名（53%），「紙オムツを使用する方法」と回答したのは27名（71%）であった。このうち，便器と紙オムツの両方に回答していたのは9名であった。

表5　教授している陰部洗浄の方法（複数回答）

n=38

方法	回答数
紙オムツを使用する方法	27
便器を使用する方法	20
その他（ポータブルトイレ）	1

2）陰部洗浄を教授する上で困難に感じていること（表6）

自由記述で回答を求めたところ，30名から記述を得た。この内容を分析した結果，52のデータが得られ，表6に示す8カテゴリーに分類された。

3）陰部洗浄の実施および教授をする上であったらよいと思う物品

あったらよいと思う物品の記述は16名による16データで，内容は以下のとおりであった。（　）内に件数を示す。

⑴陰部洗浄用容器・シート（患者の腰への負担が少ないもの，安定感があるもの）（5）
⑵陰部モデル（柔らかい素材，衣類が濡れないもの）（5）
⑶陰部洗浄用ボトル（湯量や湯の方向が調節できるもの，保温性があるもの）（3）
⑷足カバー，ガーゼ，トレイ（各1）

Ⅴ．考察

今回実施した2つの調査の結果から，臨床で実践されている陰部洗浄の方法，陰部洗浄における用具開発の必要性，そして看護基礎教育における陰部洗浄の教授方法とその課題の3つの点について整理し，考察を述べる。

1．臨床で実践されている陰部洗浄の方法

臨床において陰部洗浄を実施している看護師の99%が紙オムツを使用しているという結果は，研究者らの予想を上回るものであった。

紙オムツを使用する理由の記述から分かるように，ベッド上での陰部洗浄が必要な患者は，失禁があり日常的に紙オムツを使用していることが多く，この場合排泄後の汚れた臀部に便器を入れるのは整合性に欠ける。また，困難に感じていることの記述から，開脚や臀部の挙上ができない等，運動機能の障害により便器を使用した陰部洗浄が難しいケースが多いことや，便器の挿入によって苦痛を伴う等，便器を使用する方法には困難な点・不便な点が多いことが分かる。これらの点については，紙オムツを使用する場合，側臥位にすることで紙オムツの交換ができるため臀部を挙上する必要がなく，また側臥位で臀部を洗浄することも可能である。

また，表3に示すとおり，陰部洗浄を実施する上で，「皮膚保護のために十分に洗い流す」ことを心がけているという回答が多かった。石けんや洗浄剤が皮膚に残留すると皮膚表面のpHが弱酸性に保たれず，皮膚トラブルの原因となると佐藤（2004）が述べるとおり，十分に洗い流すことは重要なポイントである。しかし一方で，表2およ

表6　陰部洗浄を教授する上で困難に感じていること　　n＝30　（　）内は記述数

カテゴリー	サブカテゴリー	主な内容
モデル教材を使用する限界(18)	モデル教材を使用した演習の現実性の不足(6)	・陰部モデルの形態・材質は，実際と相違があり，イメージを描かせるのが難しい。 ・モデル人形の材質が硬くポイントを伝えにくい。
	羞恥心への配慮を教える難しさ(5)	・モデル人形を用いるため，羞恥心への配慮を教えるのが難しい。
	モデル教材の使いにくさ(4)	・形態や材質が実際と異なるため演習時に衣服やリネンを濡らしてしまう。 ・男子学生が装着する適当なモデルがない。
	教材の不足(3)	・男性陰部モデルが少ない。
学生の性差を踏まえた教育方法の課題(10)	男性・女性の陰部洗浄を教えることの迷い(7)	・男性と女性の両方の場合の陰部洗浄を教えた方がよいのではないかと悩んでいる。 ・男性の陰部洗浄の演習ができておらず，実習で女子学生が戸惑う。
	学生同士の羞恥心(3)	・学生同士の羞恥心が強いため，グループや演習場所を男女で分けている。
時間数の不足(7)	時間数の不足(7)	・十分な演習を行うには時間が足りない。
臨床とは異なる教育内容(6)	臨床とは異なる物品(5)	・便器を使用した方法を主に教えているが，臨床では殆ど行われていない方法なので，これでよいのか悩む。
	臨床とは異なる手順(1)	・下肢をバスタオルで覆うなどの手順が臨床では行われていない。
教育方法の難しさ(6)	技術の複雑さ(5)	・陰部洗浄は（羞恥心への配慮や臀部・背部の拭き方等）細やかな配慮やコツが必要であるが，理解・習得させることが難しい。 ・基本の技術と実際とを段階を追って伝えたいと思うが，どう伝えるのか迷う　（臨床では清拭と陰部洗浄は続けて行うことが多い）。
	学習の順序性(1)	・看護技術の単元（排泄と感染予防）の順序性が難しい。
陰部洗浄の方法の根拠の不明確さ(2)	陰部洗浄の方法の根拠の不明確さ(2)	・便器の方が不快感は少ないのではないか。 ・排泄後のオムツを利用するという臨床のやり方は清潔面で問題がないか。
オムツを使用する問題：コスト(2)	オムツを使用する問題：コスト(2)	・オムツを使用した陰部洗浄を教授するにあたり，オムツの費用がかかる。
映像教材の不足(1)	映像教材の不足(1)	・映像資料に適切なものがない。

び表3に示すように，紙オムツのコストを気にかけ，「費用負担を軽減するために排泄後の紙オムツや尿取りパッドを使用して陰部洗浄を行っている」という回答も多くみられた。石けん分を十分に洗い流すための湯量は，村中ら（2007）によると750㎖以上，氏家ら（2006）は1,000～1,500㎖必要としている。また市販の紙オムツの吸収量は，オムツ販売会社（介護ショップGAC，n.d.）によると，大きいサイズの長時間用で全吸収量が1,400㎖程度であり，尿取りパッドでは400～600㎖である。これらのことから，排泄物を吸収した後の紙オムツや新しい尿取りパッドで陰部洗浄を行う場合，洗い流す湯の量が不十分であると推察される。

さらにコストに関しては，便器を使う場合には看護者2人以上必要である場合が多いことや，便器の消毒・洗浄の手間と費用も勘案するなら，1枚約100円の紙オムツを不経済とする指摘は妥当ではないかもしれない。

2. 陰部洗浄における用具開発の必要性

前項で述べたとおり，陰部洗浄に便器を使用する方法は難点が多く，臨床の看護師の間では紙オムツが汎用されている。しかし，吸水量の制限やコスト，またあったらよいと思う物品の記述からも，看護師たちが紙オムツの使用に満足しているわけではないことが分かる。

陰部洗浄を実施する上であったらよいと思う物品として，看護師と看護教員がともに，陰部洗浄用シート（もしくは容器）について記述していた。

その要件として，患者の臀部の形状に合う柔らかい座面であること，安定性があること，臀部を挙上しなくてもよいもの，挿入しやすいもの，受水容量が大きいもしくは吸水力に優れていること，安価であることが挙げられていた。便器や紙オムツの欠点を補うものとして，これらの要件を満たす陰部洗浄用具の考案・開発が望まれる。また同時に，患者にとっても看護者にとっても安全で安楽な陰部洗浄の手順を追求していく必要がある。

3. 看護基礎教育における陰部洗浄の教授方法とその課題

1）陰部洗浄の教授内容について

看護系大学の回答者の約半数が便器を使用する方法を，また3分の2以上が紙オムツを使用する方法を学生に教授していた。両方を教えている大学が少なくないこと，また困難に感じていることの自由記述からも分かるように，大学教員がどちらを教えるか教育内容について迷い，模索している姿が浮かび上がった。迷う理由は，山本ら（2013）が指摘するように教科書に取り上げられている方法が「便器を使用する方法」である一方で，今回の調査からも明らかになったように，臨床で広く実践されている方法が「紙オムツを使用する方法」であるという，従来の教育内容と臨床での実践方法の不一致が大きい。

では，どちらを教授するのがより妥当であろうか。陰部洗浄の方法を選択する判断の基準は，清潔の目的が果たされること，患者にとっても実施者にとっても安全かつ安楽であること，そして患者の意思が尊重されることであり，そのためのアセスメントと方法の選択ができるように学生を教育していくことが何より重要である。臥床患者の陰部洗浄の方法として，現在行われている紙オムツを使用する方法と便器を使用する方法の，どちらにもメリットとデメリットがある。学生がそれを理解した上で選択できること，また患者に合わせた方法の応用や工夫ができることを目標に教育内容を構築していく必要がある。

また，教員が陰部洗浄を教授する上で困難に感じていることの記述で，紙オムツを使用する方法に関して，「便器を使用する方が患者は不快感が少ないのではないか」，「臨床で行われている排泄後のオムツを利用する方法は不衛生なのではないか」といった疑問が提示された。これらに関しては，先行研究が見あたらず，今後，エビデンスの確立に向けて研究が必要である。

さらに，「基本の技術と実際をどのように教えたらよいのか迷う」という記述もあった。臨床では，清拭時に陰部洗浄を一連の流れとして実施することが多いが，「基礎看護技術」（もしくはそれに該当する科目）において，限られた時間の中で清拭と陰部洗浄を組み合わせた演習を実施するのは容易ではない。しかし，学生の看護実践能力は，学内での講義・演習とそれを踏まえて臨地で行われる実習によって培われていく。実習における看護技術の実施について永松・室屋（2008）は，「学生による看護技術の実施は患者の安全確保が最優先であり，援助内容に関する知識・技術を実施可能なレベルまで習得させておくことが前提となる」と述べている。つまり，看護実践能力の育成に大きな役割を果たす実習において機会を逃さず実践ができるように，学内の演習では現実に近い方法でのトレーニングが不可欠といえる。

2）学生の羞恥心への配慮の必要性

看護教員が陰部洗浄を教授する上で困難に感じていることの記述から，学生の性差を踏まえた教育方法の課題も明らかとなった。近年，看護を学ぶ男子学生の数・割合が増加してきており，「実習室をパーテーションで分ける」，「別の実習室で男子学生の演習を行う」など，教員たちは男子学生・女子学生の演習グループや場所の配置に苦慮していた。陰部洗浄という技術の性格上，青年期の学生たちにとって羞恥心や戸惑いが大きく，配慮が必要である。

さらに，市販の演習用モデル人形や陰部モデルは女性型が主流であり，女性と男性，両方の陰部洗浄を教える必要があるのではないかと認識しながら，実践できていないという現状も浮かび上がった。水野・福田（2011）は，8割の学生が異性の陰部洗浄の校内演習を実施していないと報告している。陰部洗浄は強い羞恥心を伴う看護技術であり，できれば同性の看護師が実施することが望ましい。しかし，臨床，特に病棟に勤務する男性看護師の数はまだ少なく，女性看護師が男性患者の

陰部洗浄を実施するという状況は避けられない。看護教員の回答の中には，「学内での演習で女性の陰部洗浄を実施しているが，臨地実習で男性患者を受け持ち，陰部洗浄の場面で戸惑う女子学生が少なくない」との記述もあった。学内で女性・男性両方の陰部洗浄が演習できるよう，モデル教材・時間・場所といった学習環境を整えることが望まれる。

また，羞恥心を理由に適切な援助ができなければ，援助の目的を果たせないこととなる。看護を学ぶ学生に対して，専門職としての自覚を持たせるような働きかけも必要である。

3）教材開発の必要性

表6に示すように，市販のモデル教材についても様々な指摘があった。まず，モデル人形や陰部モデルの形態・材質が人間の陰部と相違がありイメージづけが難しいという点である。具体的には，女性の陰部洗浄において「尿道口を露出するために陰唇を開く」というポイントを教えようとしても，モデル教材は陰唇が硬すぎてうまく開かない，また最初から尿道口が露出しているというように，モデルのリアリティが不足している。また，形態や材質が実際と異なり演習時に衣服やリネンを濡らしてしまうため，実際の陰部洗浄よりも少ない湯量で演習を行ったり，濡らさないために物品を工夫したりしなければならない。

「看護基礎教育の充実に関する検討会報告書」（2007）にはカリキュラム改正の実施に際して留意すべき事項として，「看護技術を実際に近い状態で適用できるようにするために臨床場面を疑似体験できるような用具や環境の整備は，学生の実践能力を向上させる有用な方策であることから，演習用の機械器具や模型等の十分な配備を行い，それらを有効に活用することを推進」すること，また「必要な機械器具，標本，模型の標準を見直すべきである」と指摘されている。まさに，陰部洗浄の技術についても，教育効果を上げるためのモデル教材の提案・開発は，我々看護基礎教育に携わる者の課題である。

Ⅵ．結論

1. 臨床での陰部洗浄は，99%が紙オムツを使用する方法で実施されていた。
2. 臨床の看護師は陰部洗浄を行う上で，現状の方法に困難を感じており，陰部洗浄のための用具開発の必要性が示唆された。
3. 看護系大学では陰部洗浄について，3分の2の大学で紙オムツを使用する方法を，また約半数の大学で便器を使用する方法を教授していた。患者に合わせた方法の応用や工夫ができることを目標に教育内容を構築していく必要がある。
4. 陰部洗浄を教授する上で，学生同士の羞恥心への配慮が必要であるとともに，男女両方の陰部洗浄の演習ができるようにモデル教材や場所の整備が必要である。
5. モデル教材について，よりリアリティのある使いやすいものを研究・開発していく必要がある。

Ⅶ．研究の限界と今後の課題

今回，臨床で陰部洗浄を実施している看護師と，看護系大学において陰部洗浄を教授している看護教員の二者を対象とした調査研究を同時に実施した。臨床の看護師からの質問紙の回収率は74.3%と非常に高く，また工夫点や要望等，質問紙の余白への書き込みも多かった。このことは看護師たちの陰部洗浄という日常生活援助への関心の高さとともに，解決すべき課題が多く内在しているケアであることを我々に実感させた。この臨床の看護師たちの期待に応えるためにも，陰部洗浄の用具や教材の開発が今後の課題と考える。

また，看護教員からの質問紙の回収率は38.8%に留まり，ここから得た結果を一般化して述べるには限界があった。より回答しやすい質問紙の工夫等，今後改善を心がけていきたい。

謝辞

本研究を進めるにあたり，ご協力いただきました対象者の皆様に深く感謝を申し上げます。なお，本研究は，平成23年度関西看護医療大学研究助成を受けて実施したものであり，第11回日本看護技術学会学術集会（2012年開催）において一部を発表した。

参考文献

穴沢小百合，松山友子（2004）：わが国の看護基礎教育課程における基礎看護技術演習に関する研究の動向；1991〜2002年に発表された文献の分析，国立看護大学校紀要，3(1)，pp.54-64.

介護ショップGAC（n.d.）：おむつ各タイプ一覧，http://store.shopping.yahoo.co.jp/kaigo-gac/wc-001.html（情報取得2013/08/03）.

厚生労働省（2007.4.16）：看護基礎教育の充実に関する検討会報告書，www.mhlw.go.jp/shingi/2200/04/dl/s0420-13.pdf（情報取得2013/08/19）.

水野昌子，福田博美（2011）：看護基礎教育における性に関する学習；セクシュアリティの視点から陰部洗浄の授業内容を分析する，愛知教育大学保健環境センター紀要，10号，pp.33-41.

村中陽子，玉木ミヨ子，川西千恵美（2007）：学ぶ・試す・調べる　看護ケアの根拠と技術，p.71，医歯薬出版，東京.

永松有紀，室屋和子（2008）：成人看護学実習（急性）における学生の看護技術経験の実態，産業医科大学雑誌，30(3)，pp.359-372.

佐藤文（2004）：基本的なスキンケアの方法，臨床看護，30(8)，pp.1202-1207.

田代ひろみ，門井貴子，水野美香，曽田陽子，小松万喜子，大島弓子（2005）：基礎看護学実習における看護技術の経験状況と技術習得の課題，愛知県立看護大学紀要，11巻，pp.51-58.

氏家幸子，阿曽洋子，井上智子（2006）：基礎看護技術Ⅰ（第6版），p.357，医学書院，東京.

山本洋子，松原美紀，小平京子，笠岡和子，松尾潤子，柳澤恵美，神山幸枝（2013）：床上臥床状態にある患者への看護技術「陰部洗浄」に関する学習教材の状況，関西看護医療大学紀要，5(1)，pp.37-41.